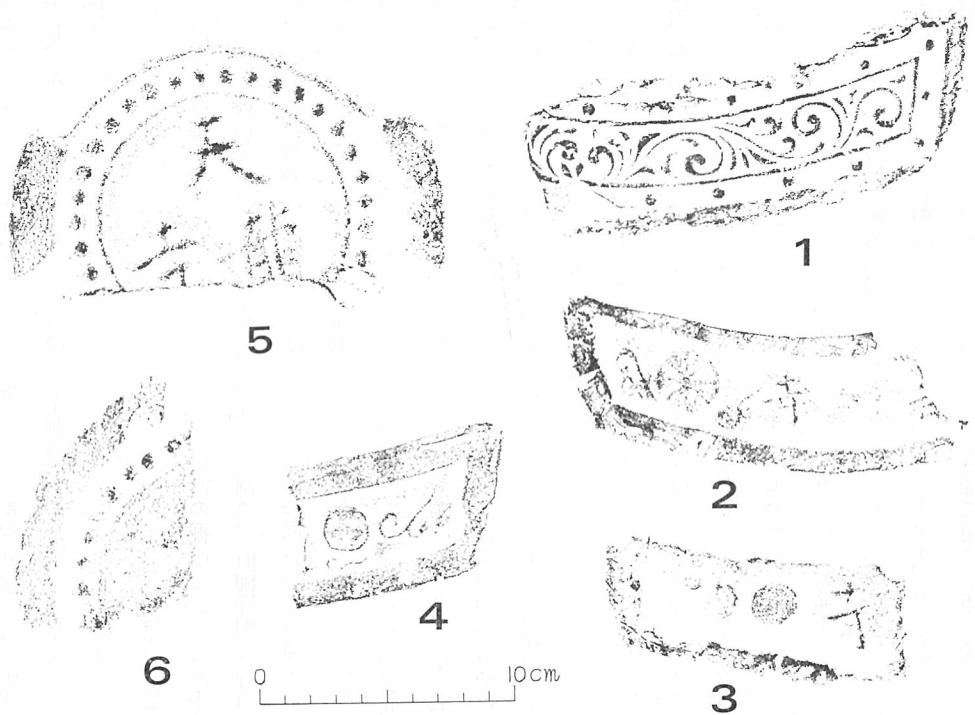


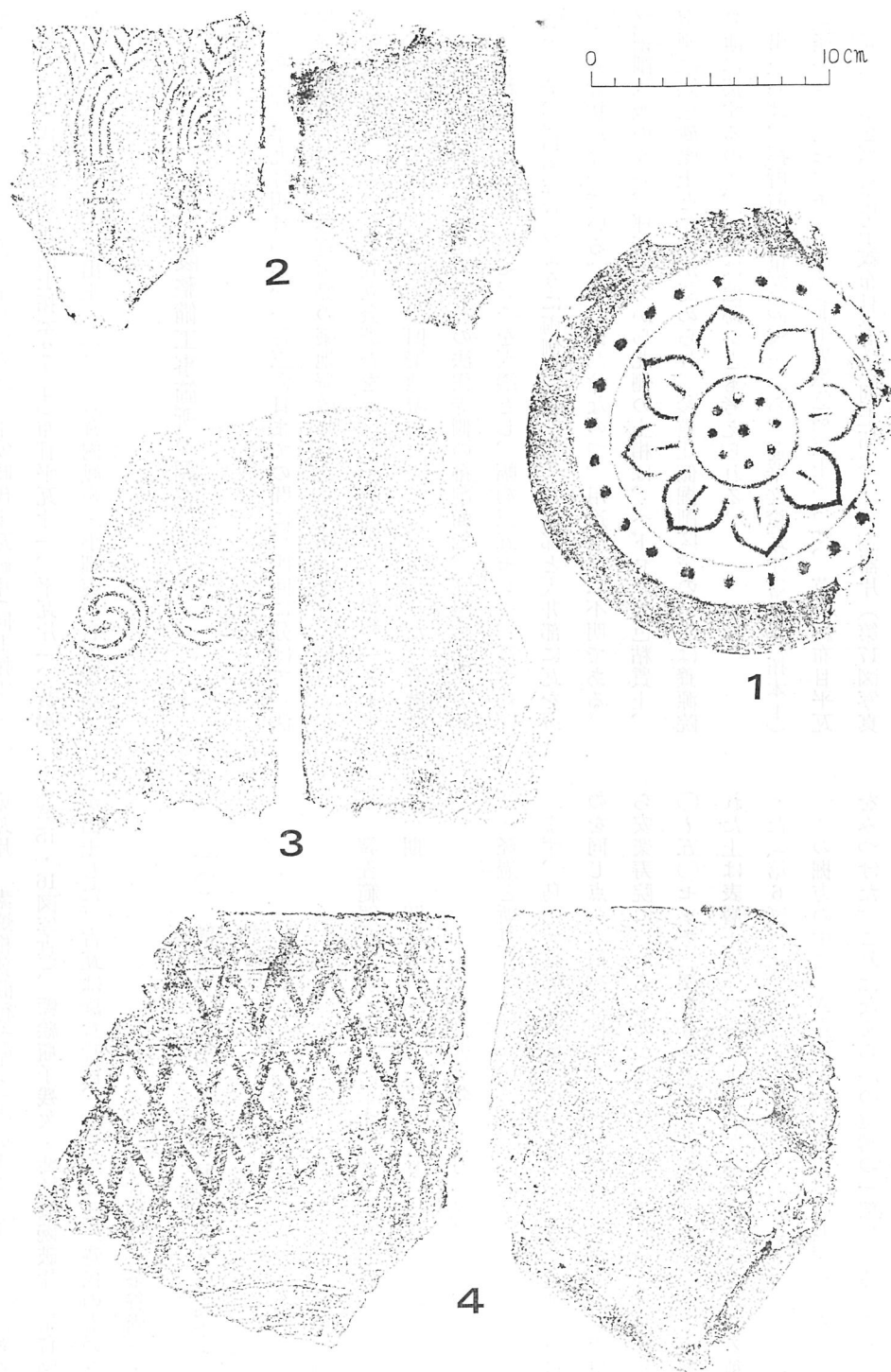
模様である。葺石は前にのべた地山に密着して据えられ、葺石の上は黒褐色の緻密な粘土によって覆われていて、葺石を境として地質上の極めて顕著な相違が認められる。いまこの葺石を直ちに営建時のものと断ずることは出来ないが、現在五号堀に堆積している一メートル以上のヘドロを除去すれば、この葺石面は渡土手本来の護岸として、適当なレベルに位置しているように思われる。葺石の直上にある緻密な粘土は古いヘドロと見られるものであるが、葺石の鑑定等に御教示を頂いた橿原考古博物館次長伊達宗泰氏が、この粘土について、元奈良教育大学教授嶋倉巳三郎氏に調査を依頼された処、この中に含まれる花粉の詳細な分析表を頂いた。それによれば植物環境は現在と殆んど同じであるが、高野槇、蕎麦などの花粉が認められるほか、清水に生育するシャジクモ類の蔵卵器が認められたのが特徴的であるとのことであった。（戸原純一）

八 後嵯峨天皇陵貯水槽拡張工事箇所の調査

昭和四八年一月二二日から二六日まで、後嵯峨天皇陵法華堂背後の貯水槽拡張工事のため、貯水槽の西側東西約七・六メートル、南北約五・三メートルの長方形の区域を約三メートルまで掘削したので、桃山監区職員で立会調査を実施した。一メートル四方程の方形の近世の廃瓦埋納墳があっただけで、他に遺構は無かった。出土物としては、中央部地下約一・五メートルの黒褐色土からあふみ鏡瓦破片二片（第4図拓本5・6）、



第4図 後嵯峨天皇陵域内出土瓦拓本（縮尺3分の1）



第5図 後白河天皇陵域内出土瓦拓本（縮尺3分の1）

地下約二メートルの褐色粘土層からは、平安時代宇瓦破片(同上拓本1)一、室町時代宇瓦片三(同上拓本2~4)布目平瓦片一、平瓦片一、黄褐色高台付鉢形陶器片一が出土した。(倉内鳳州・小畑実・石田茂輔)

九 後白河天皇陵整備工事箇所の調査

昭和四八年九月四日から一月三〇日までの間に、四回に分けて、法住寺陵拝所前及び、参道両側の築地塀改修の為基礎掘削を行ったので、月輪監区職員によりこの間立会調査を行った。掘削は、幅約一メートル、深さ約一・五メートルで、旧築地塀跡に沿って行なわれた。遺構としては、拝所前南側の西隅近くの法住寺側の掘削面で、瓦組を検出した。これは、地下約六五センチを天端とし、幅約三五センチ、高さ約四〇センチ、第14図写真のように両側に各瓦を立て、底部と天井部に瓦を置き、樋管状になっている。開口部だけなので、用途性格は不明である。又掘削区域のうち、拝所中央から北側の土相は、ヘドロ状黒色粘質土、南側は黒色砂礫土と差異が認められ、参道北側掘削区域の一部は養源院の池に接するので、北側は池跡かとも考えられる。

出土品は、拝所前中央黒色砂礫土から、蓮華文鏡瓦片(第5図拓本1)(径一八・八センチ)、拝所前中央黒色粘質土からは、草花紋布目平瓦(同上拓本2)、斜格子紋布目平瓦(同上拓本4)、陶器片(第17図写真3)、参道南側の黒色粘質土からは、巴紋布目平瓦片(第5図拓本3)、

鬼瓦片、素焼格狭間付台座・「吉水住蓮玉作」と銘のある陶製高坏残欠(第15・16図写真)、藍絵瓶子残欠・藍絵茶碗破片(第17図写真1・2)が出土した。古瓦は鎌倉時代、陶器類は江戸時代のものと考えられる。

(春日仲敦・茶谷尚三・石田茂輔)